

学童期の慢性腎疾患患者へカルタを用いて薬剤指導を行った際のセルフケア能力の変化～オレムの看護理論に沿って考える～

キーワード：セルフケア能力、支持的教育的システム

田島瑞希

I. はじめに

慢性腎疾患は、治療法として食事療法や薬物療法を行い、再発を防ぎながら寛解の維持を目指すことが大切である。現在当院の小児科では、慢性腎疾患患者に対して、内服が始まる前に薬剤師から患者と保護者に合わせた個別指導が行われ、内服支援を行っている。しかし、適切なセルフケア行動を獲得出来ず入退院を繰り返す患者もいる。慢性腎疾患を持つ患者は退院後も継続して服薬していくことが必要であるため、発達段階に応じて患者自身へ病識の理解や自己管理を促すことで適切なセルフケア行動を獲得できるのではないかと考えた。

以前、ステロイドパルス療法導入後に薬剤指導を行ったが、主体的に治療に参加できずに服薬を嫌がるような言動の見られた学童期の慢性腎疾患患者がいた。そのため、治療に積極的に取り組むことが出来る支援として薬剤師と作成した薬剤のカルタを用いて指導をしたところ、内服薬について理解すると同時に、自身の薬剤について興味を示す反応が得られた。そのため、他の学童期患者であってもカルタを用いて遊びの要素を取り入れた指導を行うことで適切なセルフケア行動の獲得ができるのかオレムの看護理論に沿って検討をしていく。

II. 用語の定義

①セルフケア能力：セルフケアの行為や操作を実施する際の行為に向けられた包括的・複合的な能力。今回の研究においては内服に関するものと限定する。

②支持的・教育的システム：セルフケアに必要な行動ができ、新しい状況への適応も学習

もできるが、現在は看護の援助が必要な人に対するシステム。

III. 倫理的配慮

対象者・家族へ対して、小児看護学会の倫理指針を参考に同意書を作成した。研究への協力は自由意志によるものとし、研究への協力の有無に不利益を被ることはないことを説明した。プライバシーの配慮について説明し、調査研究は研究目的以外では使用しない事を説明した。本研究で使用したデータについて個人が特定できないよう管理し、プライバシーを厳守した。研究終了後は使用したデータは全て研究者が責任を持って破棄をした。これらを平易な言葉で、家族・対象者へ年齢に応じた研究の趣旨・同意書の説明を行った。

IV. 研究方法

プレイルームでカルタを用いて薬剤指導を行った。その後の言動・指導内容をアンケートを用いて質問し、服薬行動や言動の変化について看護記録に記載し、情報収集を行った。

1) 研究デザイン：事例研究

2) 研究期間：2020年8月から2021年3月

3) 研究参加者：慢性腎疾患に対し、ステロイドパルス療法後に薬剤師による薬剤指導を受けた学童期患者

4) データ収集方法：

1. 慢性腎疾患患者に対してカルタを使用して、反応を作成したアンケートを用いて考察した。

2. カルタ使用後の日常生活の変化を看護記録から情報収集した。

5) 分析方法：オレムの看護計画に沿って事例展開を行った。学童期の慢性腎疾患患者を

対象に、プレイルームで保育士・看護師と共にカルタを用いた指導の環境調整を行った。日常生活における行動の変化が現れるか慢性疾患児の自立確認シートを参考にして、看護記録から情報収集を行った。

V. 結果

1) 研究参加者：慢性腎疾患に対し、ステロイドパルス療法後に薬剤師による薬剤指導を受けた学童期患者2名。

2) 結果

A氏とB氏共に服薬開始時には1日配薬を行い、その都度、声掛けて患者は内服していた。内服薬にはステロイド薬や抗凝固薬・抗血小板薬や降圧剤など、退院後も服薬が必要な薬があった。指導前には飲み忘れなどが見られ、薬剤の作用副作用についても興味を示さずに、保護者に全管理をゆだねるような発言もあった。カルタでの指導後はA氏・B氏共に作用副作用について理解している発言や日常生活における適切なセルフケア行動の獲得ができていた。

アンケートの結果と研究参加者の反応、指導後のセルフケア獲得状況の様子は表1に示す。

VI. 考察

学童前期の慢性疾患児の自立度確認シートリでは、自己管理における児童の目標は「生活上、体調面での注意することを知って、必要な時には援助を受けながら療養行動がとることができる」となっている。エリクソンの発達理論における学童期の発達課題は「勤勉性とあり、新しい知識や技能の獲得を目指す時期」である。また、ピアジェの認知発達理論の学童期における具体的操作期では、「わかりやすい説明であれば因果関係を理解することができる」²⁾とある。そのため、学童期患者に対してカルタを使用し薬剤についての情報をわかりやすく伝え遊びながら学習するこ

とは、自身の内服薬の理解促進に有効であったと考える。

櫻井らは、患者が主体的にセルフケアに取り組む姿勢が確立すると良好なアドヒアランスが実現する³⁾と報告している。また、慢性疾患患者は健康維持・増進のために自己決定に基づく自己コントロールによって、自分の健康は自分で管理していくという概念が重視されている。このことから、小児患者が主体的に学び治療に望むには、まず興味を持つ事が大切であると考えられる。そのため、小児科看護師は患者の発達段階や性格をアセスメントし、遊びを取り入れた指導を工夫して患者が興味を持ちながら学習できるよう支持的・教育的システムを発生させ患者を支援することが必要である。

今回の事例では、患者が自身の薬剤に興味を持ちアドヒアランスが向上できるよう、薬剤指導後にカルタを使用して内服薬についての指導を行うケアプランを立案した。学習を進めるに当たり、患者が楽しく学習できる環境整備のためにプレイルームでの集団指導を計画した。その結果患者らは楽しみながら学習ができ、内服薬の作用副作用について理解をしている発言も見られるようになった。日常生活においても意欲的に内服に取り組む行動が見られたことから、カルタを用いた指導によって、アドヒアランスを高めることができたと考えられる。本来、小児期は人間としての成熟を目指して発達するために成人の支援を受けながらニード充足していく存在である。櫻井ら³⁾は、退院に向けて内服管理の準備を進めている小児患者は、セルフケア能力が不足しているため、医療者の支持的・教育的システムの中、看護能力で補う必要があると述べている。今回オレムの看護システム理論を用いて他職種と協力・環境調整し指導方法を考えることで支持的・教育的システムを構築することができたと考えられる。

慢性疾患を持つ学童は、学校の学習に加え

て、自身の病気の理解や自己管理の学習が必要とされ、疾患と向き合いながら生活を送ることが求められる。疾患と十分に向き合えず適切なセルフケア行動を獲得できずに入退院を繰り返してしまうと、社会生活が中断され学童期としての年齢相応の発達課題を達成できない可能性がある。今回研究参加者らが楽しみながら薬について学ぶことができた要因のひとつに、カルタでの指導を同年代の患者2名同時に実施したという点も考えられる。本来学童期は集団生活の中で遊びや学習を通し成長していくものである。患者の性格や発達段階を考慮し、学童期の患者に対して集団指導を行うことにより、発達課題である勤勉性が得られ、入院中であっても楽しみながら社会性が身につく一助となることが期待される。

慢性疾患をもつ学童期の患者は生活していく上で疾患に向き合わなくてはならないが、発達上のニード充足のために成人の助けが必要な存在である。そのため、小児患者がセルフケア獲得に向け主体的に学ぶためには、看護師の工夫による支持的教育的システムを生じさせてセルフケア能力の開発に努める関わりが必要となる。今回の研究を通して、遊びを取り入れたカルタでの薬剤指導は効果的であったため、今後も発達段階に応じたセルフケア能力の獲得に向けて指導方法の一つとして継続して活用していきたい。

VII. 結論

今回はカルタを用いた薬剤指導後に言動の変化が見られ、アドヒアランスが向上した。また、カルタを使用することで、より内服薬について興味を持ち、主体的にセルフケアに取り組み、入院生活を送ることができるようになった。

VIII. 終わりに

本研究では対象者が2名と少なく今回の結

果を一般化する事は困難である。今回学童期の患者に対するカルタを用いた指導は、適切なセルフケア能力の獲得に効果的であったと結論がでた。しかし、実際小児科病棟で様々な患者と関わり、患者が成長しても自己の疾患について興味を持たずに保護者へ依託し、適切なセルフケア能力の獲得が出来ていない患者が多い状況であると私は感じている。患者の成長にとって適切な時期に必要な指導を進めることが年齢相応のセルフケア能力獲得に向けて必要と考える。そのため、入院患者の支持的教育的システム発生のために小児科看護師は発達段階や性格に応じて環境を整えて遊びを取り入れた指導を、工夫をしていくことが求められる。その一つの指導手段としてカルタを活用していき、アドヒアランス確立に向けて他職種と協力し支援を行う必要がある。

引用文献

- 1)文科省「慢性疾患時の自立度確認シート」
- 2)二宮啓子、今村美紀：「NURSING NICE 小児看護学論」2012.12 10 改訂第2版発行
- 3)櫻井明弓、田中裕也、松本涼子、丸山浩枝、田中真咲、中西寛子：「患児の治療への参加を目的とした患児用パスの作成」に関する研究 日本クリニカルパス学会 Vol,20 No,2 2018

慢性疾患患児の自立確認シートを参考に作成したアンケートを取り、日頃の看護の中から日常生活の変化を情報収集した。

以下のような反応が得られた。

表 1

	A 氏	B 氏
感想	<ul style="list-style-type: none"> ・これ楽しかった ・またしたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかった ・またしてみたい ・他の子もしてみたらいいのに。 <p>いいと思うよ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名前はね、全部は覚えてない
薬について	これ（ペルサンチン）は血が止まりにくい薬。赤いから覚えた。	これ（プレドニゾロン）はお腹が減る薬
今後取り組みたいこと	これから注射を頑張る	
気をつけること	<p>（ワーファリン内服中により）納豆好きだけど、これを飲んでからまだ食べれない</p> <p>（ワーファリン内服中により）こけないようにしないといけない</p>	（ステロイド内服中により）手洗いしないといけない。風邪引きやすいから
指導後の日常生活	内服することをナースコールで看護師に報告し、主体的に治療へ参加する行動があった。	自宅で使用予定の内服ボックスに看護師と共に薬を組み、毎日忘れずに内服することができていた。